

支配下の半島出身者なればこそ享受できた、「国際性」も潜んでいただろう。そして世界に主張しうる「伝統」もまた、「近代」との微妙な融合なくしては成立しない。崔承喜の『私の自叙伝』（1936）には、「朝鮮舞踊を近代舞踊の基礎の上に立って創造した」とものと明言されている。だが、その折衷によって「捏造」された「東洋」の「民族舞踊」は、皮肉にも「現代日本の女性を代表し得る」（光吉夏弥）ものとして歓迎された。

同朋から日本宣伝の手先と中傷される一方で、日本からは反日運動の嫌疑を掛けられ、コロンビアでは国際スパイとの容疑をうける。曾て朝鮮独立陰謀事件で検挙された夫とともに、日本に帰国すれば靖国神社に参拝し、「舞踊報国」の身振りで保身を図る。その振幅のなかにしか、「国際的名声」の保証はなかった。戦後「親日派芸術家」の烙印も押されながら、朝鮮民主主義人民共和国に渡り、「解放の歌」を公演し、人民俳優の称号も授与される。だが、夫の安漢は58年には肅正され、60年代なかごろより崔承喜の名前も人名録から消え、やがて消息も途絶える。川島芳子や李香蘭同様、国境と時代とに翻弄されたこの女性の「復権」を訴えることすら、半島では近年まで禁忌だった。だが、この特権的でもあればこそ悲劇的な運命を一身に背負った「往年のスター」の「復権」を語る権利など、「日本」にはありえまい。

連載 ⑤

## ある朝鮮女性舞踊家の運命

崔承喜「復権」の余白に

国際日本文化研究センター 研究員

稲賀繁美  
haga shigemi

併合下の朝鮮半島出身の彼女は、創氏改名の強制後（昭和十五年二月十一日）も、本名を改めなかった。1937年、日華事変下のサンフランシスコ公演を皮切りとした二年間、百四十回におよぶ世界公演で、すでに崔承喜の名声は広く知られ、「中国の梅蘭芳、インドのウディー・シャンカと並び称される世界的な舞踏家」となっていた。舞踊が妓生の仕事と貶められていた環境で、世界一の舞踊家となる志を抱いた両班出身のひとりの女性（1911年生）は、内外でKorean Dancer、「アジアの著名なダンサー」と紹介され、「半島の舞姫」さらには「日本の生める世界の舞姫」と喧伝されるに至る。35年ごろから白木屋の広告や婦人雑誌のモデルとしても人気を博し、有馬生馬や安井會太郎によって描かれ、川端康成からは「日本一の舞踊家」に推薦され、村山知義からは「古い朝鮮の舞踊を生き返らせた」功績を賛美され、さらには徳富蘇峰からもその「朝鮮風の踊りは殊に美しく」「大好き」だ、との賛辞を得る。だがその名はハングルではなく、あくまでSai Shokiと、日本語風に発音されていた。

「日本の色、支那の形、朝鮮の線、この三つのものが、優れた芸術性のなかに融け合った」とも形容されたその舞踊。シカゴ・デイリー・ニュースはそこに「朝鮮舞踊を忘却から救って世界の舞踊愛好家に一大奉仕をした功劳」を認めた（1940年2月24日）。だが、彼女の欧米での成功の陰には、当時の大日本帝国